

Title	『神のみくらに玉と輝け：愛と祈りの教育者中川咲子の物語』（石渡秋/取材、文、聖学院広報センター編・発行、2010年、177頁）
Author(s)	森田, 美千代
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-No.5 : 4-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2896
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

『神のみくらに玉と輝け—愛と祈りの教育者 中川咲子の物語—』
 (石渡秋 / 取材・文、聖学院広報センター編・発行、2010年、177頁)

森田 美千代

美しい作品が誕生した。それは、石渡 秋氏による取材・文と、関根 美鈴氏による表紙イラストを、聖学院広報センターが2010年に編集・発行した書物である。石渡氏は、精力的に取材し、愛情溢れる文章によってその成果を読者に差し出している。関根氏は、中川咲子の生涯を象徴的に物語っている、「ぶどう」と「矢車草」を描いて、表紙を飾っている。書物のタイトルの『神のみくらに玉と輝け』は、「ひたすらに歩みしらよあまかけり神のみくらに玉と輝け」(本書99頁)と詠んだ中川咲子(1892-1979)の歌から採られている。

元日銀総裁でありまた学校法人聖学院名誉理事長だった速水優氏は、「母と兄が尊敬しつづけた中川咲子先生」と題するメッセージを本書に寄せている。氏は、「長兄が、1920年から3年間中里幼稚園[聖学院幼稚園の前身]に通っていました。兄とは二歳下の姉も中里幼稚園にお世話になりました。ここで出会ったのが中川咲子先生です。中川先生は母や兄たちを教会に導いてくださり、後々、母と兄が私たち兄弟みんなを信仰に向かわせてくれました。我が家にキリスト教の香りがみなぎる源が中川先生だったのです」(5頁)と述べている。さらに、速水氏は、「中川先生は、聖学院の歴史の中ではたったの10年間の勤務ですが、その存在は聖学院全体の誇りです」(7頁)とも記している。

そのような中川咲子とは、どのような人だったのだろうか。1892年、山梨県甲府市に生まれ、父の影響で洗礼を受け(14頁)、山梨英和女学校卒業後は、東洋英和女学院師範科の前身である上田保母伝習所(1908年に長野県から正式に認可された)に、1912年に進んでいる(14-16頁)。

中川は、その上田保母伝習所でどのような教育を受けたのだろうか。「当時の伝習所学科課程表

をみると、(中略)キリスト教の学びとしての聖書の学びと心理学以外はすべてフレーベルの教育理念に関係した学びとなっている」と、『東洋英和女学院保育者養成のあゆみ』(1994年)から、石渡氏は引用している(18頁)。

中川の在学時代(1912-1914)は、宣教師のカザリン・ドレーク(1878-1957)が二代目の所長であった。ドレークは、「カナダのオンタリオ州ダウンヴィルに1878年に生まれ、ダウンヴィルの高校を卒業後、アメリカのミシガン州フォルビス保母学校に入学した。フォルビス保母学校を卒業後、郷里のダウンヴィルの幼稚園に勤務した」(55-56頁)。ドレークが学んだフォルビス保母学校は、「フレーベル(1782-1852)革新派の進歩的な教育思想を有していた」(56頁)という。

したがって、中川が上田保母伝習所でドレークから受けたフレーベルの教育は、アメリカ経由のフレーベルであり、しかもフレーベル革新派(保守派ではない)の進歩的なものであったといえよう。

中川が勤務した中里幼稚園は、文部省の認可を得て、1912年に女子聖学院の構内に創設された。中川は、1920年から1930年まで、主任保母として勤務した。

では、中川が主任保母であった時期の中里幼稚園の保育内容の特徴は、どのようなものであったのだろうか。当時の資料(例えば、保育日誌など)があれば、中里幼稚園の具体的な保育内容がわかり、したがって特徴も明らかになるけれども、残念ながら資料が残っていない(112頁)として、石渡氏は、鈴木健一氏(元聖学院幼稚園園長)の「明治大正期における保育思想受容に関する一考察—中里幼稚園の主任保母 中川咲子の場合—」(『キャンパスミニストーリー』第15号、学校伝道会、2003年、19-69頁)の論文に依拠して、1. フレー

ベルの保育理論を重んじたこと 2.保護者（特に母親）に積極的に働きかけたこと 3.キリスト教会を重んじたこと 4.自然を大事にしたこと を特徴として挙げている（53頁）。ただし、4.の項目は、石渡氏自身によるものである。

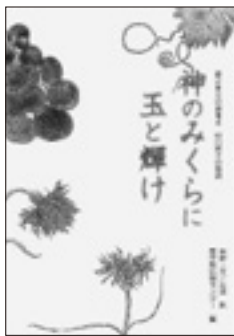
ここでは、中川がフレーベルの保育理論を重んじたことについて、もう少し分け入って見てみたい。アメリカでは、1890年代に、フレーベル主義を忠実に守る保守派と、フレーベル主義を批判的に見直す進歩派に分かれた（111頁）。中川が、上田保母伝習所でドレークから受けたフレーベルの教育は、後者の進歩派であった。しかし、如何ほどまでに進歩派であったのか。このことが問題になる。

石渡氏は、日本では、「1910年代になると、恩物重視の傾向から子ども中心主義の傾向が強まり、子どもたちの自発性を重んじ、フレーベルの技術よりも精神にシフトした保育が行われた」（27頁）と指摘している。一方、元お茶の水女子大学学長の本田和子氏は、中川が中里幼稚園に勤務し始めた1920年頃も、保育内容はフレーベル主義に基づく内容、つまり恩物も使っていたらと推測している、と石渡氏は紹介している（111頁）。その理由は、1920年という、アメリカではフレーベル批判が終息して、子ども中心の新しい幼稚園が花を咲かせた時期だが、日本は、アメリカから

ワテンボズれているから、まだまだフレーベルにこだわっていたと思うと見なす、本田氏の考えを紹介している（111頁）。他方、鈴木氏は、中川の保育は恩物を使った古い保育ではなかったと思っていると、石渡氏は紹介している。その理由は、二つあると鈴木氏は見なしている。一つは、中川の文章にも、他の教師たちの文章にも、「恩物」という言葉が一度も出てこないことである。もう一つの理由は、中川が上田保母伝習所で受けた教育が、デューイの『学校と社会』の思想に相当影響を受けていると、鈴木氏が見なしていることである（150頁）。評者は、中川の保育および当時の中里幼稚園の保育が如何ほどまでに進歩的であったかに関しては、実際は、本田氏と鈴木氏の上述の発言のはざまにあったのではないかと考えている。中川は、フレーベルにそれほどこだわってもいなかったし、デューイのフレーベル批判の立場に自覚的に立っていたとも言えないのではないか。デューイの『学校と社会』は、初版と改訂版があり、1899年に刊行された初版には、「フレーベルの教育原理」の章はなく、これが加えられたのが、1915年の改訂版においてであった。1915年には、ドレークは日本の上田保母伝習所で既に指導に当たっている時期なので、デューイの思想に徹底的に入り込むところまで行っていないと見なすのが妥当ではないだろうか。

聖学院幼稚園は、2012年に創立百周年を迎える。一世紀にも及ぶ神の導きと支えに深く感謝を覚える者である。一人でも多くの方が、この美しい本書を手にとっていただくことを最後にお勧めしたい。

（もりた・みちよ 聖学院大学総合研究所教授）



『神のみくらに玉と輝け』 税込¥2,000

取材・文、石渡秋／聖学院広報センター編

発売：シャローム印刷

ISBN978-4-921120-02-3

全国の書店または Amazon.co.jp で注文することができます。